



松本大洋さんは、映画化された『ピンポン』などで有名な漫画家さんです。しかし彼が幼少期、児童養護施設で過ごしていたという事はあまり知られていません。

前回ご紹介した、りさりさんは、施設で過ごす女の子たちの日常を描くのに長けた作家さんですが、松本大洋さんの作品『Sunny』には、施設の男の子たちの日常が描かれています。松本さんの体験がベースになった作品です。

「自分の幼少期を作品に描くことで、周りのひとに迷惑をかけるのではないか」、「描いたときに自分がどういう気持ちになるのだろうか」など様々に考えた松本さんは、20歳のデビュー当時から、児童養護施設の日常を描く構想を持ちながらも、描くことを先送りしていたと言います。でも、「40歳を過ぎていつまでも描けるわけではないと悟り出し、ここでやろうと一大決心をして描き始めた」そうです。歳をとりすぎてしまうと記憶は美化されてしまいます。施設で感じた悲しさや理不尽さ、また喜びなどのリアルな強さが薄れてしまうことを懸念したのかもしれない。

親元で暮らせない子どもたちが暮らす施設「星の子学園」。その片隅に置いてある廃車の日産サニーがこの作品のタイトルです。施設の子どもたちは、動かない車の運転席にエロ本を隠したり、ハンドルを握って脱走を夢見たりします。

星の子学園の子どもたちは、両親を亡くして一人ぼっちになった少女以外、みな親が健在であるにもかかわらず一緒に暮らせないという状況にあります。どの子も、親が迎えに来てくれることを心から待っています。

そしてその気持ちとは裏腹に、「自分は親に捨てられたのかもしれない」と疑う気持ちも強く持っています。

主人公の春男は施設に預けられたストレスから髪の毛が真っ白になり、学校では「ホワイ

ト」と陰口を叩かれる問題児。ケンカ、万引き、不登校などで荒れ狂いますが、たまに一時帰宅を許してくれる東京の母親の前では、良い子ぶろうと頑張ります。2巻から母親と春男のエピソードを紹介しましょう。

春男はふだん、施設のある四日市の方言を話しますが、母親からは「上方漫才みたい」「そんて治るのよね？」と言われてしまいます。

母親の家に入った春男は、時計や本、手鏡など母親の身近にあるものを見て「お前ら、お母さんと一緒におられてええな」とつぶやきます。「オレ^{ほか}放されてしもた」…。

夕食に訪れた中華料理屋で、星の子学園の様子をはしゃいで話す春男に、母親は「楽しそうね、学園…」。一瞬黙った春男。だが気持ちを抑えられず、涙ながらに「楽しなんかあるわけないやろ！ 地獄にきまったあるやん！」「オレあんな^と所早よ出たいねん！ お母さんと一緒に暮らせてえな！」と大きな声を出します。「言葉かって直すやん！ ちゃんとええ子にしとくから、約束するから！」…

母親は新聞を盾に「どなる人とは、お母さんお話しな」とそっぽを向いてしまうのです。

翌日、ひとりで野球場にいった春男は警察官に保護され、母親が迎えに来ます。帰りの電車で、母親は春男に言います。「ひとつお願いしていい？ これからはお母さんって呼ぶのやめて、名前で呼んでほしいの」。春男は「なんで？ お母さんはオレのお母さんやん」。母親は「でもお母さんは春男のお母さんである前に矢野杏子なのよ」と告げます。

春男が、母親が手に繋がりとうると、「カサカサじゃない」と母親は気づきます。「前にクリームあげたよね」と聞く母親に、春男は「あるよ」とハンドクリームの缶を出します。「お母さん…きょうこさんのおいするさけ使わんと、こないしてかぐねん」と鼻に近づける春男。

母親は何も言わず、うつむきがちにドラッグストアでハンドクリームを買占め、春男に持たせます。

施設に帰る春男を駅まで送りに来た母親は、電車に乗った春男に言います。「それじゃあ元気でね。ホームの端っこふらふらしたら駄目よ」。春男も気丈に「病気とかなったらアカンで。またオレと^あ会うてな。オレずっと待っとるさけな。ぜったい忘れんとってや」と叫びます。

そして電車のなかで、見知らぬおじさんにみかんをねだったかと思えば、同年代の子どもに「何ニヤついとんねん、コラ！」と絡むのです。

春男がなぜ荒れるのか、その理由は行動の一部始終を読めば理解できそうです。しかし春

男の母親は、終始、感情を押し殺したような表情で言葉数が少なく、何を考えているのか、どんな事情があったのかがわかりません。でも、春男のことをまったく気遣っていないわけでもないようなのです。

こうした登場人物の心の奥を覗き込み、行間を読む作業が「Sunny」の魅力です。とても文学的な作品なのです。

松本大洋さんはインタビューで次のように言っています。

「施設で暮らした経験がない人だったらもしかして可哀想に描くかもしれないけど、子供ってのは意外としたたかにやってるもんですよ。」

ただ可哀想なだけではなく、泥臭く子どもらしくいきいきした様子を見せる春男たち。「Sunny」からは、家庭環境に恵まれなかったからこそ、リアルでひりひりするような日常を生きている子どもたちの姿が読み取れます。

※松本大洋さんのインタビュー内容は下記を参考にしました。

「ナタリー 松本大洋が一大決心して描いた「Sunny」の受賞に感謝、第61回小学館漫画賞」

<https://natalie.mu/comic/news/178593>

「ナタリー Power Push 松本大洋 祝 IKKI10周年、看板作家5年ぶりの帰還」

<https://natalie.mu/comic/pp/sunny>

※ 本連載へのご意見、ご感想などをお聞かせください。

sako@hgu.ac.jp 迫 共（さこともや）